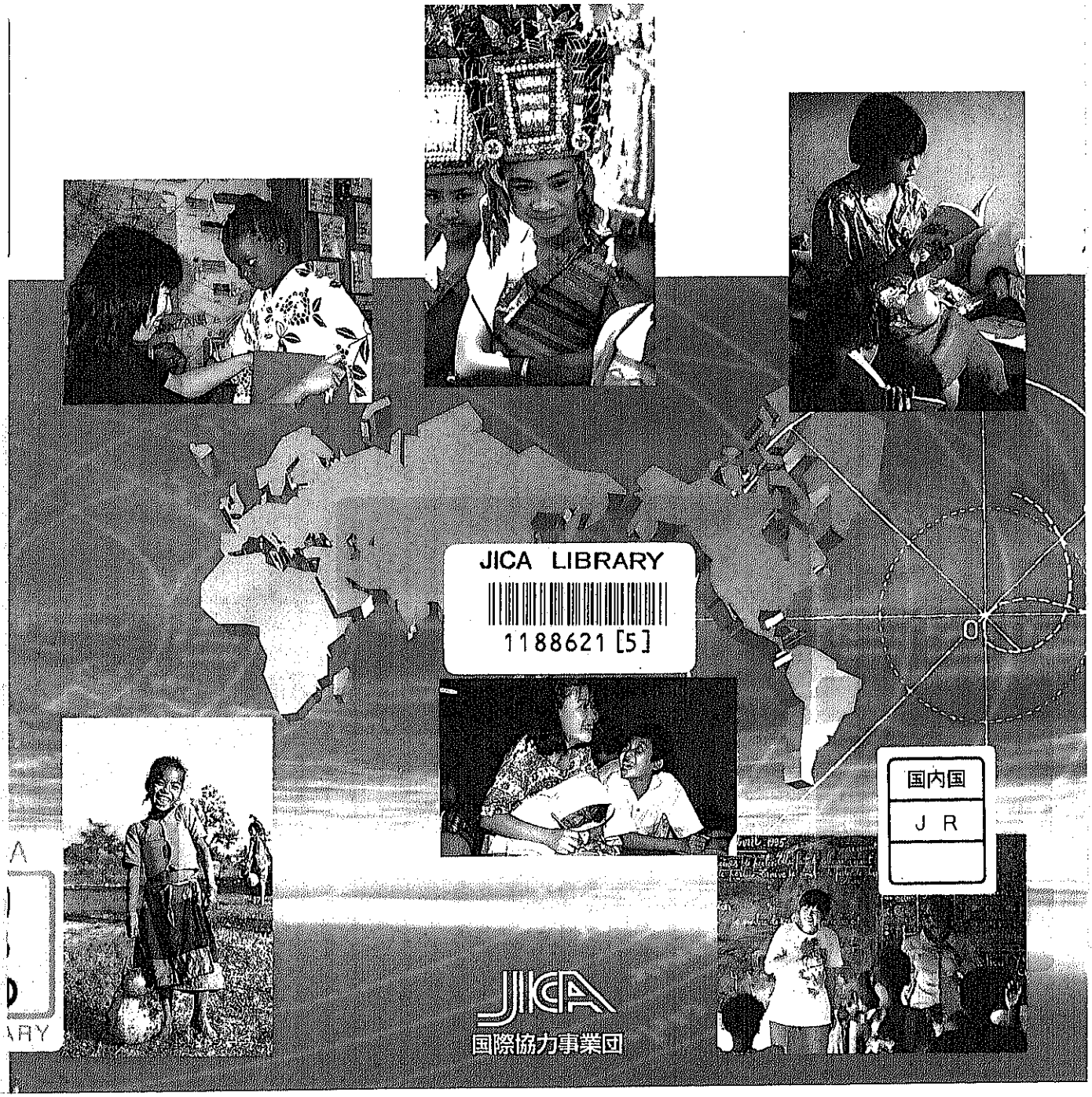
授業に役立つ総合学習の手引き

ふれあえば、世界はやさしい

平成11年度高校教師海外研修に参加して



JICA LIBRARY
1188621 [5]

国内国
JR

JICA
国際協力事業団

はじめに

国際協力事業団（JICA）は、政府開発援助（ODA）のうち、「人づくり、国づくり、心のふれあい」を合い言葉に、研修員の受け入れ、専門家・青年海外協力隊の派遣などの「人を通じた国際協力」を中心に実施する特殊法人です。

日本は今では世界有数のODA供与国となりましたが、第２次世界大戦後しばらくの間は、被援助国として諸外国の支援により復興を果たし、その後高度経済発展を遂げるに至りました。今の日本の繁栄も開発途上国をはじめとする他国との相互依存の上に成り立っています。現在、世界最大の援助国となった日本には、開発途上国のニーズに応え、世界の平和と発展に積極的に貢献していくことが求められており、人を通じた国づくりを支援しているJICAの責務はますます高まっています。

JICAは現在、国民の皆様に私どもの活動に「理解、支持、参加」をいただくため、国民参加型の国際協力事業の推進とその一環としての開発教育支援に取り組んでいます。

全国の高等学校において開発教育や国際理解教育に取り組んでいらっしゃる先生方や開発途上国の抱える問題に関心を抱いている先生方を対象に開発途上国における経済、社会、教育の実情やJICAの実施する国際協力の現場視察を目的とした研修旅行を実施しています。今回の研修では、ザンビア14名、バングラデシュ８名、ボリビア11名、合計33名の先生方に７月から８月にかけて約２週間の研修に参加していただき、開発途上国および国際協力に対する見聞を広めていただきました。

この度、研修に参加された先生方のご協力により、研修で得た経験にもとづいて行った授業実践例を冊子としてとりまとめました。この冊子が開発教育や国際理解教育に関心のある方の参考となり、今後導入される総合学習の一助になれば幸いです。

平成12年３月

国際協力事業団
国内事業部長　今津　武

CONTENTS

はじめに

未知の国ザンビアをT－TとNIEで取り上げる ……庄司　一幸　4

高校教師海外研修実践報告……和泉　順子　11

異文化理解～バングラデシュを通して
開発途上国における諸問題を考えよう……有本　秀夫　20

生徒の主体的な学習を通して考察させる開発教育のあり方……水口　和博　30
～自然環境と人間の共生から～

農業科目における開発教育の実践……濱里　登　34
～ボリビア・浄細移住地～

新しい授業の創造をめざして……小島　義晴　42
～アフリカの大地、ザンビアを知る～

自分の意見・考えを発表しよう……中島　恭子　42
～開発途上国の人々のくらしを通して～

学ぶ意欲の糸口を探す……煙草　里恵　44
～南米ボリビアの体験を通じて～

生徒たちによる国際事情研究プロジェクト……阿部　英樹　45

募集概要……48

事前研修……48

事前研修日程……49

事前研修：開発教育ワークショップ……50

コース別日程／参加者氏名（ザンビア）……56

コース別日程／参加者氏名（バングラデシュ）……58

コース別日程／参加者氏名（ボリビア）……60

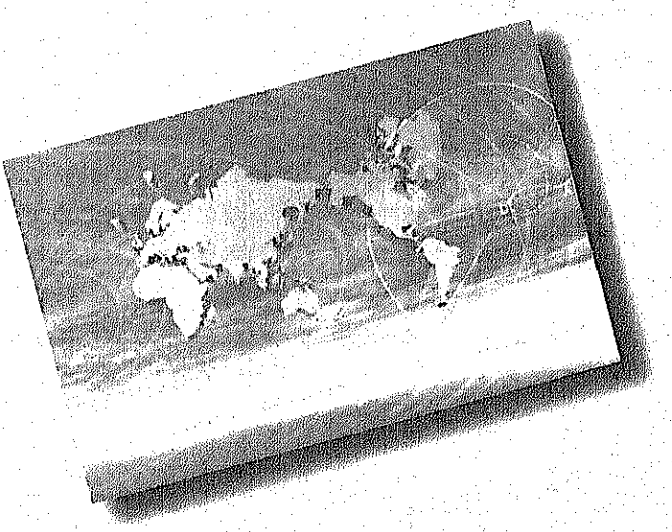
訪問国概要……62

開発教育関係団体及び教材紹介……65

JICAはこんなこともしています ……70

1188621 [5]

研修を生かした授業実践例



未知の国ザンビアをT－TとNIEで取り上げる

KAZUYUKI SHOJI
庄司　一幸
地歴・公民
福島県立石川高等学校

はじめに

私は、これまでアジア中心の開発教育に取り組んできた。それは、私の異文化理解の原点が、中国やインドでの体験にあるからだ。

1977年5月、私は日中平和友好条約締結前の中国を約2週間にわたって訪れた。

戦後、団体での初めての東北地区（旧満州）の旅ということで、各地で熱烈歓迎を受けた。

しかし、撫順郊外の平頂山で、戦争中に日本兵によって、虐殺された人々の遺骸をみせられ驚愕するとともに、私は日本人として過去の歴史を背負って生きることの意味を教えられた。

翌年、インドの仏蹟を訪ねる旅に出た。一流ホテルの前にたむろする物乞い。町で行き交うハンセン氏病患者。清濁が混在する社会の姿に、強烈なカルチャー・ショックを受けた。

この旅を通して、私はアジア中心の開発教育を「倫理・社会」で始めた。22年前のことである。

その後、「現代社会」、「日本史」、「倫理」で開発教育を実践してきた。

本校では、NIE（Newspaper in Education：教育に新聞を）で、開発教育を手がけ、最近は、「内なる国際化」ということで、在日外国人の地方参政権問題を取り上げている。

また、アジア中心の開発教育のほかに、青年海外協力隊員の活動をビデオなどを使い取り上げ、高校生エッセイコンテストへの応募を通して、開発教育に対する興味・関心を高めてきた。

海外研修の参加にあたって

私は、今回の海外研修の参加にあたって、下記のようなテーマを設定した。

（1）ザンビアに関する情報の収集

開発教育を行うためのザンビアに関する情報を収集し、教材化の材料とする。

ザンビアをはじめ、開発途上国に関する情報を、日本で手に入れることは困難である。そこで、研修旅行中に、紙幣、切手、新聞、チラシ、教科書、民芸品、銅製品など、さまざまな物を手に入れてきた。持って来ることができないものについては、写真に撮ってきた。

（2）日本の援助の実態とザンビアが抱える問題

日本のザンビアに対する援助の実態を把握し、ザンビアが抱える問題点について理解する。

このことについては、国際協力事業団のプロジェクトの現場や青年海外協力隊員の活動の様子を視察したり、教育省の事務次官、中野大使、JICAの職員、専門家、青年海外協力隊員などの話によって、所期の目的を果すことができた。

特に、日本大使館の協力によって、日本の援助について掲載された現地の新聞記事のコピーの提供を受けることができたことと、サンデー・メイルの記

者と会うことができたことが、最大の収穫であった。

(3) ザンビアの人と生活から、日本を見直す

開発教育の要は、異文化理解にある。異文化理解というと異なった風俗、習慣、宗教、言語などに注目しがちであるが、私はその文化をつくり上げてきた人々に対して畏敬の念をもつことが最も大切なことだと考えてきた。

文化に優劣はないはずだが、日本人は欧米の文化は、舶来志向で有り難がるが、アジア・アフリカの文化に対しては正当な評価を与えてこなかったように思える。

そんな気持ちから、今回の研修旅行では、ザンビアの人々と、できるだけ多く触れ合うようにした。そして、数多くの人々を写真におさめ、写真を撮るたびに、住所を教えてもらった。帰国後、交流をもつためである。また、かれらが何を考え、何を望んでいるかを知ることができるからである。

ザンビア人は争いを好まず、温厚で友好的な国民である。特に、日本人に対しては大変友好的である。その理由は、日本がJICAなどを通して、長年ザンビアに援助してきたことが、ザンビアの人々に評価され、感謝されているからである。

さらに、驚いたことには、ザンビアの高校の世界史の教科書に、日本の明治以降の歴史が11ページにわたって取り上げられていることである。

ザンビアの人々が、日本の歴史を学び、自国の発展に役立てようとしていることを知り、日本人として誇らしく思った。

これに対して、日本はアジア・アフリカの国から学ぶべきものはないのだろうか。

ザンビアでは、ルサカなどの1部の都市を除いて、前近代的な生活を送っている。

日本人は金がないと何もできないと思ってしまっている。しかし、金や物がなくても、電気やガスがなくても、生きていけるのである。そして、生きる上で何が大切であるかを知ることができる。

日本では、アジア・アフリカへのホームスティには熱心ではないが、人として何を大切に生きていかなければならないかを学ぶことができる。

私たちは、開発途上国に物的に援助することによって、開発途上国から人としての生き方の原点を学ぶことができるのである。

3 共に生きる社会の実現をめざして

今回の海外研修を活かした授業の構築にあたって、NIEとT－T(Team-Teaching：チーム・ティーチング）を用いることにした。

授業は3年の選択日本史（48名）で、8時間の予

学習指導案（8時限）

学習内容	指導方法・学習方法	指導上の留意点ほか
1時限 ・ザンビアとは、どんな国？ ・新聞からアフリカに関する記事を探す。 ・ザンビアの新聞から日本に関する記事を探す。 （英語の教師とのT－T）	・ザンビアについて知っていることを、すべて書き出す。 【NIE授業】 ・生徒をいくつかの班に分ける。1週間分の新聞から、アフリカに関する新聞記事を探す。 【NIE授業】 ・ザンビアの新聞から、Japan、Japanese、JICAなどの単語を手がかりに、日本に関する記事を探し出す。	・読売、朝日、毎日、福島民報、福島民友の5紙を用意した。 ・ザンビア滞在中に手に入れたDelimailとTimes of Zambiaを使用。 ・探し出した新聞記事の内容について、英語の教師から説明する。

学習内容	指導方法・学習方法	指導上の留意点ほか
2時限 ・サブ・サハラアフリカ諸国の現状を把握するとともに、ザンビアの抱える問題点を考える。	・アフリカの白地図上に、主なサブ・サハラアフリカ諸国の国名と①人口の年間増加率　②年間出生数　③5歳児未満死亡率　④成人の総識字率　⑤小学校の総就学率を記入する。(作業) ・完成した地図を基に、ザンビアの抱える問題点を考える。	・UNICEF、世界子供白書：1997年版
3時限 ・開発途上国の人口問題について考える。(理科の教師とのT－T)	【NIE授業】 ・人口爆発に関する新聞記事を読み、増加の要因として指摘されている点を考え、ザンビアを含む開発途上国の人口問題について考える。	・1999年9月23日付福島民報朝刊（資料1） ・人口増加は環境抵抗の除去により生じた、不自然なものであることを理解させたい。
4時限 ・日本のザンビアへの援助の実態を理解する。	・JICAプロジェクトのなかの感染症対策プロジェクト、粘土コンロ製造技術普及および青年海外協力隊員の活動状況について理解する。	・ザンビアの抱える問題点について再確認させる。
5時限 ・ザンビア人やザンビアで働いている人に手紙を出す。(英語の教師との連携)	・ザンビア人やザンビアで働いているJICAの職員、協力隊員に手紙を出し、ザンビアおよびザンビア人に対する理解を深める。	・海外研修でふれあってきたザンビアの人達の写真を見せ、手紙を出す人を選ばせる。
6時限 ・ザンビアにおける日本理解の状況を知る。(英語の教師とのT－T)	・ザンビアの高校の世界史の教科書を使い、ザンビアの人々が、日本の歴史を学び、自国の発展に役立てようとしていることを知る。	・教科書"Senior Secondary WORLD HISTORY"(写真9) ・Sample questionsに日本文で答えさせる。
7時限 ・開発途上国の食糧危機の解決策のひとつである科学技術の可能性と問題点について考える。(理科の教師とのT－T)	【NIE授業】 ・ザンビアなど開発途上国が抱える食糧危機の解決策のひとつとして、遺伝子組み換えなどの科学技術の可能性と問題点について考える。	・1999年4月27日付毎日新聞朝刊（資料2） ・1999年5月20日付大分合同新聞（資料3）
8時限 ・共に生きる社会の実現をめざして。	・6,000人のユダヤ人の命を救った杉原千畝のビデオや本を読み、国際社会のなかで、いかに生きるべきかについて自分の考えを作文にまとめる。	・テレビで放送された杉原千畝のビデオ ・「六千人の命のビザ」杉原幸子著、大正出版ほか

定で、理科と英語の教師とともに、計画を立てた。学習指導案の詳細は別表の通りである。

おわりに

1999年11月26日、第6回NIE教育研究発表会が、本校で行われた。

その公開授業の準備のために、理科の小針淳教諭（福島県立白河高等学校）と英語の松本聡二講師（福島県立石川高等学校）と、ホテルに泊まり込み、十分な話し合いを行い、学習指導案を作成することができたのは、大変有意義であった。

開発教育は、総合的な学習のテーマの1つとして注目されている。それだけに、多面的・多角的な視点からの考察が必要であり、それを実現するためには、他教科との連携がますます必要になってくる。

今回、理科の教師とのT－Tにより、人口爆発を生物学的視点からとらえることができた。また、食糧危機を乗り越える方策として、遺伝子組み換え作物やクローン技術を考させることができた。

さらに、英語の教師とのT－Tによって、現地の新聞や世界史の教科書を取り上げることができ、現地で働くJICAの職員、青年海外協力隊員およびザンビアの人への手紙も書くことができる。

このように、T－Tは、総合的な学習の魅力を引き出すのに、最適である。

このT－Tの魅力について、今回の指導案づくりに関わった2人も、次のように述べている。

▶環境汚染や食糧、エネルギー問題といった地球規模の問題は、社会科との関連が強い。「開発教育」として取り上げていくためには、社会科とのT－Tは不可欠である。また、「遺伝子組み換え」「クローン技術」といった生物学的科学技術は、バイオテクノロジーとして脚光を浴びており、これから授業で取り扱うケースがますます増えるだろう。その際、単に生物学的な原理や方法だけを教えるのではなく、社会的なテーマとなっていることをとらえさせたい。（理科：小針淳教諭）

▶外国の記事や教科書を社会科の教師とのT－Tにより利用すると、大変興味深い授業になる。微妙な表現は社会科教師からの説明を受けることにより、ひとつの歴史的事件も世界史的見地からも取り扱うことができる。（英語：松本聡二講師）

これからも、開発教育をすすめていくにあたって、T－TやNIEを積極的に試みたいと考えている。

写真1
アグリカルチャーショー（農業祭）の露店にて

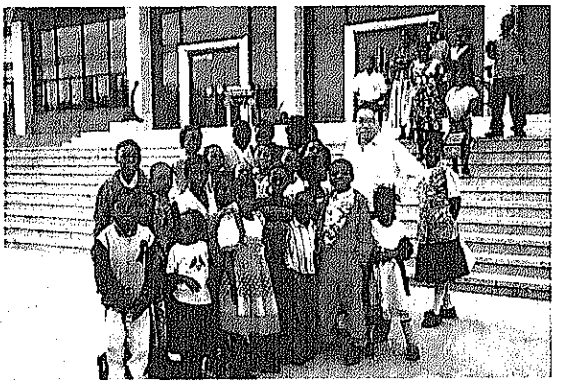


写真2
ルサカ市の国立中央博物館前で、見学に来た子供たちと交流

写真 3
ルサカ市からリビングストンに向かう途中のマザブカにて

写真 4
リビングストンの大衆レストランで会ったザンビアのファミリー。息子さんは沖縄に友達がいるとのこと

写真 5
ルサカ市とリビングストンの中間にあるチョマのチョマセカンダリースクールでの数学の授業風景

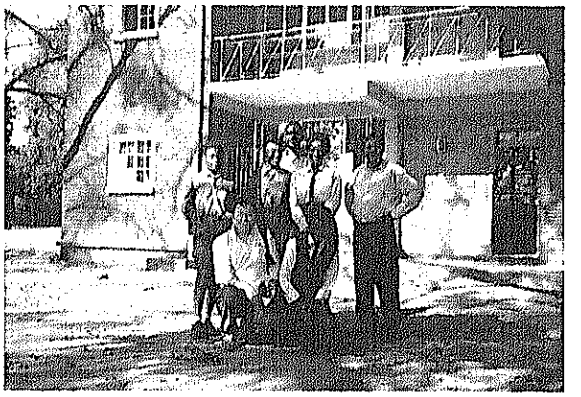


写真 6
ルサカ市のDavid Kaunda（デビッドカウンダ）テクニカルハイスクールの生徒たちと

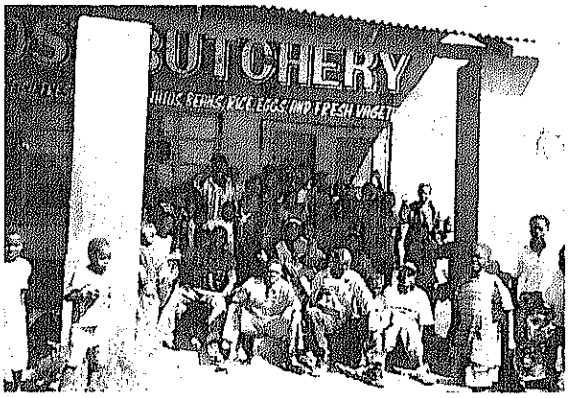


写真 7
ルサカ市のジョージタウンというコンパウンド（低所得者居住地区）にて

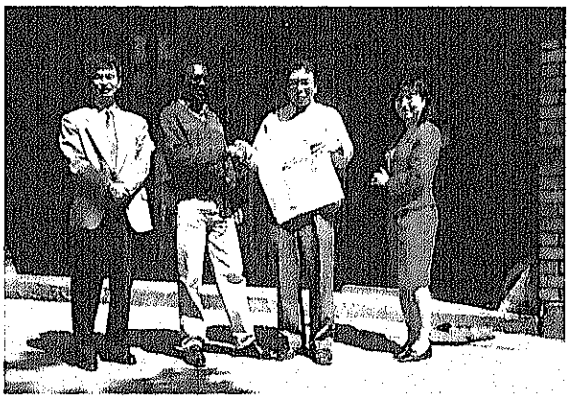


写真 8
在ザンビア日本大使館の協力でサンデーメイルのエディター Nebat（ネバット） Mbeweg（ムベウェ）氏（左側２人目）と会う（デイリーメイル社前にて）

左からJICAの田辺職員、ネバットメベウェ氏、庄司教諭、在ザンビア日本大使館高柳専門員

写真 9
ザンビアから教材用に持ち帰った品々。中央の『ワールドヒストリー』には、日本の近現代史について、11ページにわたる記述がある。

資料1　1999.9.23　福島民報

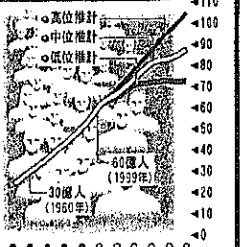
世界人口60億人

国連「白書」

国連人口基金（UNFPA）は十月十二日、世界の人口が十月六十億人に達するとの「一九九九年版世界人口白書」を発表した。六〇年の三十億人から倍増するのに三十九年しかかからず、半世紀後の二〇五〇年には八十九億人になる可能性が高いと予測している。

39年間で倍増

世界人口の推移（国連推計）



ほぼ匹敵する七十八億人が毎年増加している。

欧米や日本などで出生率が低下する一方、アフリカや南アジアでは人口増のスピードが依然速い。

白書が重視しているのは、積極的な国際リプロダクティブ・ライツ（出産や性に関する権利）が満たされない点。年間一億七千五百万件の妊娠のうち半数近くが「望まない妊娠」や「望んでいない時期の妊娠」で、発展途上国のカップルの四分の一が避妊を実行できない状況という。

資料2　1999.4.27　毎日新聞

クローン牛肉は安全か

出荷頭数

すでに144頭　食肉は66頭

専門家

「一卵性双生児と同じ」

情報公開

「表示は必要」の声も

資料3　1999.5.20　大分合同新聞

チョウに被害の恐れ

危ない遺伝子　組み換え作物

ワシントン19日共同

害虫対策のため、遺伝子を組み換えて殺虫剤成分を持たせたトウモロコシが、チョウに害を及ぼす恐れがあると、米コーネル大のジョン・ローシー助教授らが二十日付の英科学専門誌ネイチャーに発表した。遺伝子組み換え作物は米国を中心に普及する一方、欧州では規制論も出て揺り、今後議論になりそうだ。

同助教授らは、殺虫剤成分でBTと呼ばれる細菌毒素の遺伝子を組み込んだトウモロコシの品種を調べた。同品種は農薬の使用を減らせる上、害虫以外への有害性は無視できるとされていた。しかし、この品種は花粉にも毒素ができることから、同助教授らはトウモロコシ畑の周囲に多いオオカバマダラというチョウへの影響を実験室で確かめた。

トウモロコシの花粉は風で六十メートル以上飛ばされて畑周辺に広がる上、花粉が出る時期とチョウの幼虫が育つ時期が一致しているため自然の状態でも、チョウに被害が出ていた可能性が高いという。同助教授は、農薬を減らせる利点とチョウなど周辺への害を総合的に比較する必要があると指摘している。（共同通信）

このチョウは幼虫の間、畑の周囲に生えるトウワタという植物の葉を食べて育つ。研究グループは、トウワタの葉にBT遺伝子を組み込んだ品種の花粉を振り掛け、この葉だけを組み込んだ遺伝子を組み換えをしていない普通のトウモロコシの花粉を振り掛けた葉で育てた幼虫はすべて生き延びた。

トウモロコシの花粉は風で六十メートル以上飛ばされて畑周辺に広がる上、花粉が出る時期とチョウの幼虫が育つ時期が一致しているため自然の状態でも、チョウに被害が出ていた可能性が高いという。同助教授は、農薬を減らせる利点とチョウなど周辺への害を総合的に比較する必要があると指摘している。（共同通信）

高校教師海外研修実践報告

JUNKO IZUMI
和泉　順子
英語
静岡県立長泉高等学校

1 クラス構成について

ザンビア研修の体験を活かした授業をするために、委員会活動（国際理解委員会）にするか、いわゆる英語の授業で実践するか迷ったが、すべての授業は高校３年生の選択英語オーラルコミュニケーションBで行った。この授業は、クラスが18人の少人数なので、発信型アクティビティーに適したためだ。授業自体はリーディング・ライティングも含んだ活動で内容的には必ずしもオーラルコミュニケーションだけのための授業ではない。

授業形態は英語を母国語とする外国語指導助手（以下ALT）とのチームティーチングであり、ビデオ・インターネットを見ることができるLL教室で行っている。選択授業であるので、スピーチやアクティビティーに慣れ、外国語で話すことも活発に行うことのできるクラスである。

2 授業目的

研修に参加する前には漠然と「映像を使った授業を組み立ててみたい」と思っていた。現在はALTに生徒たちも慣れ、映像教材なども豊富であるが、英語を母国語としない人の英語を聞く機会は依然として少ないだろう。私たちと同じ、第１位言語ではない英語を聞くことによって、生徒たちに世界言語としての英語の重要性と、英語の壁を越えることの簡単さ、どんな英語でも「あり」なのだということを知ってほしかった。研修中はビデオを持参し、なるべく英会話を録画するように心がけた。研修中に見学したアグリカルチャーショウや現地高校生や大学生との会話を録画したものが役立った。

もう一つの目的としては、実際ザンビアに出かけたのは私だけであるが、疑似体験としてでも生徒たちに「アフリカに行った」気分を味わってほしかった。そのためには単なる報告では意味がないので、最終的にはザンビアに向けて何かを発信することによって、間接的にでもザンビアの教育機関やマスコミに参加することを目標とした。

3 授業展開：５時間

1時間目

活動１　アフリカの国の地理感覚をつかむ。（リスニング）

まず、アフリカの白地図をプリントにして配る。（資料１）

大きな川や海や砂漠（ザンベジ川、ナイル川、インド洋、サハラ砂漠など）の位置だけだいたい確認しておく。

（使用表現）

The country which is located the most southern part of Africa is South Africa.

The country which has Nile River is Egypt.

などという表現を使って、国の名前を埋めさせる。

選択肢はあらかじめホワイトボードに書いておく。

活動2　ザンビアについての基本情報を得る。(リーディング)
英語で書かれたザンビアの紹介文を虫食い状態にして、配る。(資料2)(英語の表現はインターネット等から集めた情報を使用)文章を読み上げ、聞き取った単語を穴埋めする。
その後、それぞれの文を読ませ、簡単な質問をする。(人口は何人か、公用語は何かなど)

活動3　次回予告として、1シーンだけ、ビデオを見せる。(リスニング)
ルサカからリビングストンへ移動する途中に立ち寄ったガソリンスタンドでオレンジを売りに来た少年にしたインタビューを聞かせる。スクリプトも書いておき、穴埋め形式で内容を聞き取らせる。(3分程度)
会話の中には、(1)オレンジはいくらか(500クワッチャ)、(2)少年の取り分はいくらか(全部売れると500クワチャ、全部売れないと100クワチャ)(3)どこに住んでいるか(チョマの「コンパウンド」)、(4)何歳か(13才)、(5)家族は何人かといった情報が入っている。

(1)　How much is an orange?
(2)　How much can he get from an orange?
(3)　Where does he live?
(4)　How old is he?
(5)　How many family member does he have?

といった表現を使って、何人かに尋ね、最後にプリントを配って答えを書かせる。

2時間目

活動4　アフリカと日本の距離感、違いなどをつかめるよう、アフリカに旅行をする計画を立てる。観光旅行で使う表現も学ぶ。(スピーキングアクティビティー)
<用意する物>旅行会社役用アフリカの地図数枚。それぞれの地図に「Honeymoon　Tourist」旅行社用地図、「Adventures travelers bureau」旅行社用地図など、地図ごとに特徴を持たせておく(たとえばハネムーン旅行会社には、エジプトや、セイシェルに印を付けておく)。興味関心を持たせるため、絵はがきや写真の切り抜き(ナショナルジオグラフィックなど)、地理教材のピラミッドやビクトリア滝などの写真も用意しておく。4から5人のグループを作り、TouristとAgent役(旅行者と観光業者役)に分ける。Agentには地図と写真を渡す。I recommend you..... といった表現をおさらいしておく。
また、Embassyチームも作り、内乱や危険情報も与える。
目的の国に行くには、特定の国を経由しないと行けないという情報も与えておく(たとえば、「ザンビアに行くには、BritishAirwaysを使ってロンドン、または、南アフリカ航空を使ってヨハネスブルク経由でないと行けない」など)。Tourist役の生徒たちはそれぞれの旅行会社役のチームを回り、情報を集める(I'd like to go... などの表現を使う)。日本を出発して、ヨーロッパまたはアジアの1都市に立ち寄り、ザンビアに行って、日本に2週間以内に帰ってくる、という計画を立てる。
最後に、どういうルートを組んだかを英語で発表する。どの国に行って何を見るためにそのルートを選んだかも発表する。経由先に制限があるということから、旧植民地－宗主国の関係に気づいた生徒もいた。

3時間目

活動5　現地で録画したビデオの見せたいシーンだけをあらかじめ編集しておく。ビデオを見て、話されている内容のメモを取らせる。
書取は一句一句正確でなくても良いが、だいたい何を言っているのかは教師が指示しておく(会話がおこっている場所などは前もって教えておく)。
必要であれば何回かそのシーンを繰り返す。
アグリカルチャーショーなどで、現地の人たちと話しているところなどを聞き、どういう仕事をしているか想像する(「選挙管理委員」や、「出版会社」、

「ミルミル生産者」、「車の運転手」など)。
どういう人がザンビアで働き、どんな仕事が求められているのか、グループで自分たちの意見をまとめる(たとえば、教科書会社は衛生指導の役割もかねていること、ミルミルを作るのは国内だが、販売や流通はインドやレバノン、シリア系の人々が携わっていることなど)。最後に、グループごとに発表する。

活動6　宿題として、毎週提出させている英語ジャーナル(英作文日記)にビデオの感想を書かせた。

＜生徒の英語ジャーナルより＞

▶ "I was impressed by the video. I heard that Africa has a serious AIDS problem. And people who lives in developing country do put fire on field for agrecultural purpose. Students in Zambian high school listen to their class seriously. They don't have their own textbooks. I thought, there is too much things in Japan but there are little things in Zambia. I hope things should be divided equally all over the world."

▶ "I want to go to Zambia. I find Zambian high school is differnt from Japanese high school. If I were there, my parents might not let me go to school. In spite of that, so many students are late for our school. I wish I were able to speak English more, I want to be an English teacher in Zambia"

▶ "People who lives in Zambia sings well. We seldom sing songs as they do, even a school song！"

▶ "I think people who were born in poor country always think about others, such as parents, sisters and brothers, but poeple in rich country think about themselves, 'I want more clothes, more shoes, more cars...' I wonder why."

▶ "I was very surprised to hear they are still 13 years old. Some children can go to school, but others can't go to school. I felt it is really sad. I thought I want to do something I can."

「ただ見せるだけにしたくない」という気持ちがあり、歯がゆく授業をしたが、こちらが予想するよりもずっと多くのことを考えてくれたようだ。
前もって「後でこのビデオの登場人物に手紙を書くんだとよ」と言っておいたので、生徒たちは「この人に書きたい」という気持ちでビデオを見、具体的に手紙を書くことができた。
この5時間の間には、1週間程度間をあけてあり、ディベートについての表現を学んだり(資料3)、「制服はあるべきか」「土曜日に学校はあるべきか」というような簡単なディベートのアクティビティーを間に挟んだ。英語でいきなりディベートをするのは無理だし、日本語で意見を言うのもなれていないので、準備をしておくようにした。

4時間目

活動7　「写真を見て、説明をするアクティビティー」(スピーキング)
用意する物：生徒の写真2枚、学校行事の写真、ザンビアの写真(ナショナルジオグラフィック日本語版1997年10月号の「ザンベジ川」特集の写真、および青年海外協力隊員が普及に協力した足踏み式井戸の写真)。
生徒たちの写真をビデオプロジェクターで見せ、「何をしているのか、絵から分かることをなるべくたくさん英語で言ってみよう」、と問いかける。はじめは導入の目的で、生徒自身が被写体になったなるべくおもしろい写真を見せる。それについて生徒は"Kentaro is singing"などと言う。3枚目はサイを保護するために小銃を持ったレインジャーが焼畑の後の草原を歩いている写真を見せる。周りと話し合って、何をしているのかなるべく想像させる。同様に、足踏み式井戸の写真も見せ、気づいたことを言い、書けることをなるべくたくさん英語で書く。たとえば、The man has a gun./There is an animal. という簡単な物から、The man tries to shut an animal which is disappereing. というような問題意識を持ったものまで、生徒たちは簡単な英語でも「たくさん」気づいて書くことを目的に活動していた。

写真からわかる問題点を自分たちで気づかせ、こちらからは質問が来たときだけ回答するようにするのは、なかなか難しかった。

5時間目

活動8　ザンビアの問題点を知る

用意する物：生徒の英語ジャーナルや、ディスカッションの様子、生徒から出た質問をまとめて、生徒が問題意識や関心を持った人物やことがらと、手紙の書き方に使う基本的な表現について英文でまとめてプリントにしておく。（資料4）

また、インターネットを使って、ザンビアについての資料を少し見せる。大統領の写真もホームページに載っている（資料5）ので生徒の興味関心を引きつけるには良い。ザンビアの新聞社（Times, Post, The Mail）や政府のページもあったようだが、回線の状態があまり良くなく、思うようには見せられなかったのが残念である。

活動9　ザンビアに手紙を書く。（ライティング）

手紙を書くためのフレームを簡単に作った後、もう一度早送りでビデオを再生して誰に手紙を書くのか決める。そのシーンでテープを止めながらプリント（資料4）を読んで、どういう人物か、もう1度、英語で説明をし、情報を与えて手紙を書きやすいような環境を作る。

それぞれザンビアの高校生、小学生、大統領、現地新聞、JICAザンビア事務所等、自分で選んだ相手に手紙を書く。

生徒の書いた手紙（資料6）

6－1　JICAザンビア事務所の人たちへ

6－2　チョマセカンダリースクールの高校生へ

おわりに

インターネットを使う授業では、回線の調子が悪く、授業中にうまく見たいページにジャンプすることができなかった。JICAでは授業で活用できるページも用意されているというが、あくまで「活動を知る」ことが目的であるようで、生徒にも分かる英語で書かれた活動報告書などがほしいと思った。ザンビアでのエイズの現状を調べるのに、山梨医科大学の柿沼裕先生の書かれた、英文のザンビア大学（UNZA）でのエイズ研究の報告は役に立った。

また、1つの話題（ザンビア）について授業を組み立てるということは予想していたより大変だった。英語という教科で、教科書に沿った勉強ばかりしていると生徒も飽きるが、教師も甘えた状態になるということがよくわかり、今回の努力は貴重な経験になった。

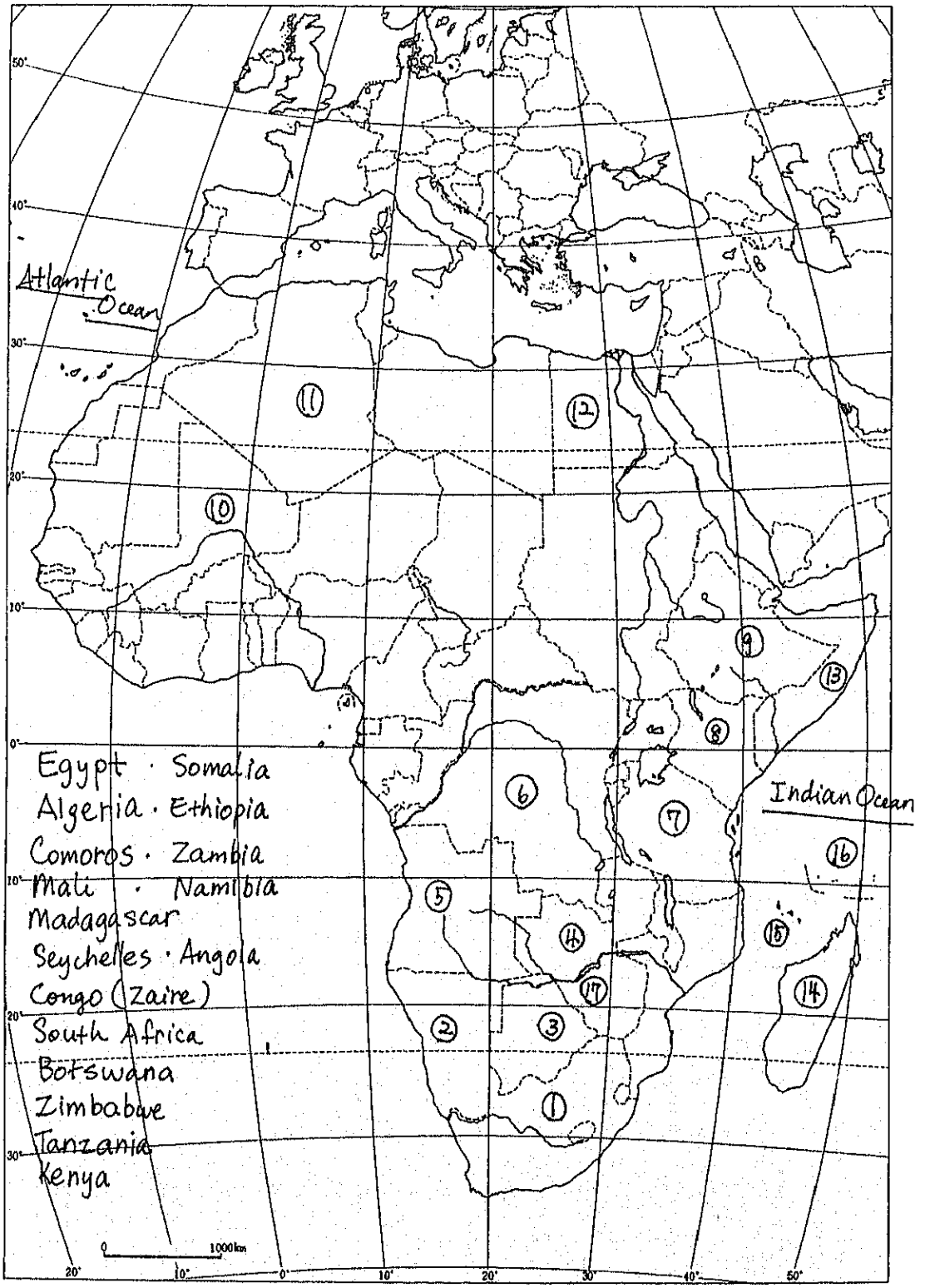
生徒にとっては、「突然先生が夏休みにアフリカに行って、帰ってきたらその授業ばっかりやっていた」という感想もあったようだが、言葉遊びの延長のアクティビティーばかりのオーラルコミュニケーションの授業をやるより、刺激になったようだ。リスニングとスピーキングに力を入れたい「英語」と、新しい情報に出会い、考えさせる「社会科」の境界線を授業の中でどう引くかでずっと迷って授業をしたが、それも貴重な経験になった。

生徒が行ったことも、見たこともない国の人に向けて何かを発信できたことが、この研修全てをふりかえって一番うれしかった。

参考資料

静岡県教育委員会チームティーチング資料集
"It Takes Two : The Team Teaching Magazine Issue＃12", 1999, Shizuoka Prefectural Board of Education
ナショナルジオグラフィック日本語版
1997年10月号
マイクロソフトネットワーク「エンカルタ」
http://encarta.msn.com/find/zambia

資料1 アフリカ白地図。リスニングアクティビティーとして国名を聞き取らせる



工夫!? ザンビアの基本情報はインターネットから入手。リーディング教材として使用。

Zambia, country in ( ) central Africa, is located west of Malawi and east of Angola. The area is 752,614 sq. km (290,586-sq mi.). Zambia's capital and largest city is Lusaka.

Zambia is mostly high plateau with a flat or gently undulating terrain. Mountains rise in the north. Generally subtropical in ( ), most of the country has savanna-type grasslands interspersed with trees. Animals include elephants, lions, rhinoceroses, and several varieties of antelope. Commercially important minerals exist in the country's northern ( ) belt. Zambia also has substantial hydroelectric potential.

Zambia's population (1997 estimate) is 9,265,017. It is predominantly ( ) and made up of more than 70 Bantu-speaking ethnic groups. The country is divided into nine provinces. Besides Lusaka, other major population centers include Ndola, Kitwe, Mufulira, and Luanshya. The majority of Zambians are Christian. More than 70 African languages are spoken, although the official language is English. School attendance has increased substantially at all levels since Zambia's independence in 1964.

Zambia's economy is based largely on copper and cobalt ( ). Other mined minerals include gold, silver, and gem-quality emeralds. Some 75 percent of the working population is engaged in agriculture, largely subsistence farming, which remains vulnerable to weather fluctuations. Principal crops include ( ), sugarcane, and cassava. Beef and ( ) cattle are raised for domestic use. Economically important manufacturing activities include the smelting and refining of copper and other metals, vehicle assembly, petroleum refining, food processing, and the production of fertilizers, explosives, and textiles. Zambia's unit of ( ) is the kwacha (1204 kwachas equal U.S.$1; 1996).

資料3

ディベートで使う表現
（静岡県教育委員会 "It Takes Two" より）

Vocabulary for Debates and Discussion

1. When you want to state an opinion:
In my opinion....
I think(feel) that....
I believe....
It seems to me that.....

2. When you want someone to repeat or explain:
I don't understand what you mean....
Would you explain that please.....
I'm sorry, but I didn't understand your point.
Could you give me an example?
What do you mean by.....?

3. When you want to agree with someone:
I agree with you.
I think so, too.
You're right.
That's a good point.
I see what you mean.

4. When you want to disagree with someone:
I disagree.
That's not the point.
Don't you think that.....?

5. When you want to persuade someone:
You must admit that.....
Do you really believe that.....?
Don't you think that.....?

資料4

生徒の資料やビデオをみたときのディスカッションのポイントをまとめたもの

♯College Students
They studies paramedic with JICA volunteer teachers.(Ms Kira and Ms Uchimura)
They need a scholarship/sponsorship to continue their study.
After graduation, they look for their job in Zambia, but their salary is too law in Zambia, so they try to find their job overseas such as South Africa, Kenya, Namibia, and other African nations.
They are from small village in countryside.
They lives on campus.
They looks

? What is different from Japanese college students?

♯Choma Secondary School Students
They don't have textbooks, schoolbus and enough money for tuition.
They have to walk many hours to come to school.
They have to work their families too.
One of the big problem is AIDS; many students' parents and students are dead for AIDS. They are transmitted by parents, and a lot of students became orphaned

?If you were a Zambian student, what you can do to continue your study?

♯President
The problems are:
AIDS and Malaria
Economic problem/ aid
The civil wars in Angola and Zaire
Average life:45 years old

?What can you do if you were Zambian President.?

♯Newspaper
What you learned

♯JICA Zambia
In Zambia 73 volunteers works for education, well-building, primary health care, medical service, automobile machinery education, and job training for skillless people.

?Do you want to be a volunteer in developing country?
?Why?/Why not?

♯Kayosha Primary School
Kayosha Primary school is half volunteered and half public elementary school.They spoke tribal language in home, but speak English in school.
They don't have enough textbooks or notebooks.
A lot of students are dead by sickness.

Zambian teacher's salary is very low, because country's economic condition are so bad. That's why teachers need another job to live.

?If you are a teacher at primary school, what you can do and what you can teach?

Dear
How do you do. My name is
I am a student in Nagaizumi Senior Highschool in Shizuoka, Japan.
I am studying English and I studied about Zambia.
I learned that/I agree/I feel /I would like to/It made me to

Thank you very much for reading this letter.
Your name

資料5 マイクロソフト「エンカルタ」で検索したインターネットでのザンビア情報。URLは、http://encarta.msn.com/find

msn

The view up here is incredible!

ENCARTA®

Sponsored by Hooked on Phonics®

Home | Find Zambia Go | Help

What's New

LEARNING ZONE

Partners

SmarterKids.com

Hooked on Phonics

Your child can be Earth's best friend

Zambia

Free Concise Encyclopedia Article

This article in Deluxe has 3 times as many words.

I. Introduction

Zambia, country in south central Africa, west of Malawi and east of Angola. The area is 752,614 sq km (290,586 sq mi). Zambia's capital and largest city is Lusaka.

II. Land and Resources

Zambia is mostly high plateau with a flat or gently undulating terrain. Mountains rise in the north. Generally subtropical in climate, most of the country has savanna-type grasslands interspersed with trees. Animals include elephants, lions, rhinoceroses, and several varieties of antelope. Commercially important minerals exist in the country's northern copper belt. Zambia also has substantial hydroelectric potential.

III. Population

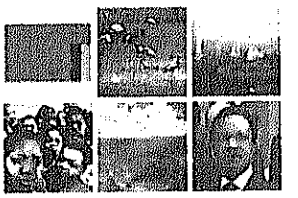
Zambia's population (1997 estimate) is 9,265,017. It is predominantly rural and made up of more than 70 Bantu-speaking ethnic groups. The country is divided into nine provinces. Besides Lusaka, other major population centers include Ndola, Kitwe, Mufulira, and Luanshya. The

Deluxe Article

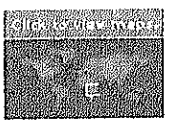
Click below for the full-length article. Sections marked with ★ are available only in Deluxe.

I. INTRODUCTION
II. LAND AND RESOURCES
III. POPULATION
IV. ECONOMY
V. GOVERNMENT
VI. HISTORY

Multimedia



Maps



Latest Updates

DECEMBER 99
AIDS Leaves Millions of Orphans in Sub-Saharan Africa

Selected Web Links

資料6－1　JICAザンビア事務所へ生徒が書いた手紙

Dear JICA Zambia

Hello My name is Rika Murofushi

I am a student in Nagaizumi
Senior highschool in Shizuoka, Japan
I studied about Zambia at my school
And I also watched video of Zambia
I'm interested in JICA
I want to do something
I don't know what can I do
There is a few medical service
AIDS prevention is needed
Can funds help children from AIDS?
There is many things in Japan.
I think that things devide equally
all over the world.
Thank you very much for reading
my letter. From Rika

資料6－2

チョマセカンダリースクールの生徒への手紙

DEAR: Choma Seroudary School Students.

How do you do. My name is Taeko.
I'm a student in Nagaizumi senior highschool in
Japan. I am studying English and I studied
Zambia. I was surprised that you have to walk
many hours to come to school. I spend about
one hour to come to school. So I always
complained Since I heared that you have to
walk many hours, I couldn't say complaints
You're great!! You stand on your own feet. That is
very good. We respect you. AIDS is very
fertible disease. So you have to care your own
body. Panitab. In Japan, AIDS increase too much.
I wish that medicine of AIDS was found early.

異文化理解～バングラデシュを通して開発途上国における諸問題を考えよう

HIDEO ARIMOTO
有本　秀夫
英語
和歌山県立南紀高等学校

はじめに

このたび国際協力事業団（JICA）の高校教師海外研修プログラムによりバングラデシュにおける政府開発援助、非政府組織（NGO）の活動の様子を現地で見聞きするというすばらしい機会に恵まれた。個人的にはいわゆる「第三世界」を見たことが無く、授業で異文化理解、環境問題そして海外において活躍する日本人の様子等々を扱ったりする時には、ビデオ、ニュース雑誌等から生徒に紹介するしかなく、いつも何か物足りなさを感じていた。現在の国際化の方向がかつての欧米指向からより身近なアジア指向に変わりつつある現状を踏まえて、この海外研修を通して学んだことを学校教育現場で異文化理解、環境、民族、開発、人権等々との関わりにおける教育活動に生かしていきたいという願いで研修に参加した。

現地ではわずか1週間あまりの研修ではあったが、バングラデシュにおける国際援助の一部分を見聞したり、現地の人々と話をし、人々の生活にふれるといった貴重な体験をさせていただき、バングラデシュの文化、習慣、教育事情そして人々が現在抱えている諸問題等々をわずかながらかい間見ることができた。

異文化理解教育としての授業

まずはじめに、現時点で学校において異文化理解に関する授業は英語科、社会科（地理、現代社会等）、国語科、家庭科等々どの教科においてでも実施することはできると考えている。しかし現在の教育課程から、また英語科の教師という職務上の立場より英語の授業は日頃からできるだけ日本語より英語を使って行うということを心がけているので、バングラデシュに関する題材を扱うのに蕩々と日本語で授業をすることはおおいに違和感を感じるという思いがした。

また授業のタイトルは内容的に考えて開発教育、国際理解教育等々考えられるが、現時点でより身近であると考えられる「異文化理解」とすることにした。そして授業を英語の時間よりLHR（ロングホームルーム）の時間で扱うのが現時点で最も適切であると考え、実施することにした。

授業内容及び目標：4時間

第1時

日本との比較において、大国インドに隣接する小国、バングラデシュの概要(地理、政治、経済、言語、宗教、文化、教育、日常生活等々）を知る。

第2時

ビデオ、スライドを視聴し、現在バングラデシュがかかえている諸問題をとらえ、感想や意見をまとめる。

第3時

バングラデシュの経済状況、医療衛生状況等を具体的に知り、日本が行っている援助のいくつかを紹介する。

第4時

我々の住む日本と比較しながら、バングラデシュに関する学習を通して開発途上国とは具体的にどんな国で、どのような問題があるか考えさせる。そして生徒なりに問題解決方法を模索させる。

授業展開

第1時

	指導内容	学習内容	指導上の留意点	資料等
導入	●ブレーンストーミング、ペアーワーク、グループ活動	●バングラデシュについて知っていることを書き、話し合う。	●バングラデシュについて生徒たちがどの程度知識をもっているかを自由に書かせ、話し合わせる。	
展開	●グループごとに発表	●グループごとに発表する。	●グループごとの発表を黒板にまとめる。	
	●バングラデシュについて話す。	●地理的な認識をする。	●バングラデシュの地理的な位置関係をつかませる。	OHP
	●国の概要と日常生活を知る。	●国の概要(面積、人口、気候、言語、就学率、宗教、食事、服装等)を把握する。	●興味を持たせるよう生徒に視覚的手段で説明を行う。	統計 写真1、2、3 スライド
まとめ	●本時のまとめ	●感想でまとめる。	●わが国との比較において感想文を書かせる。	用紙

第１時の生徒の感想

a）最初は男がスカートのような服を着ているのは、変に思えたが、気候を考えてみた場合、夏は特に涼しそうで、それぞれの土地の気候に合った過ごしやすい服を着ているのだなと思った。

b）最近イスラムのことを家族とテレビで見て少し興味を持っていたので、バングラデシュのことを勉強する機会がほとんどなく、どこにあるかも知らなかったので、今日はおもしろく、興味の持てる授業だった。

c）街中に公衆トイレがなかったり衛生的にきれいではないので、私には向かない国だと思った。でもバングラデシュの人たちは自分の国に誇りを持っているのはすごいと思った。この点は私たちは見習うべきだと思った。

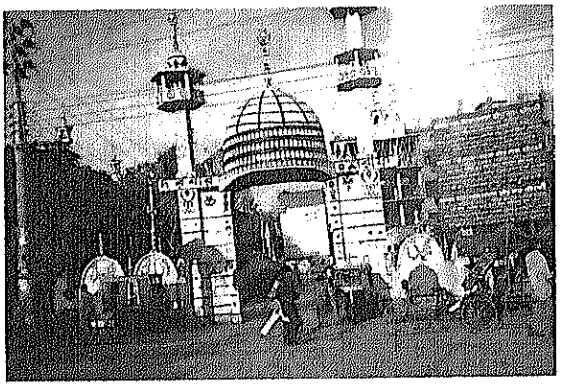


写真１　ダッカ市内のモスク

d）北海道より少し大きい土地に、日本の人口と変わらない人が住んでいるというのはすごいと思った。人が多すぎるのが貧しいことの原因なのかなと思った。それにびっくりしたのは、１日３食は当たり前だと思っていたが、２食だとお腹がすいてとても我慢できないだろうと思った。

e）インド、ネパールなど就学率の低い国があるのは知っていたが、バングラデシュは今まで全く意識した国ではないけれども、こんなに就学率が低く貧しいとは知らなかった。

写真２　カレーを中心とした食事

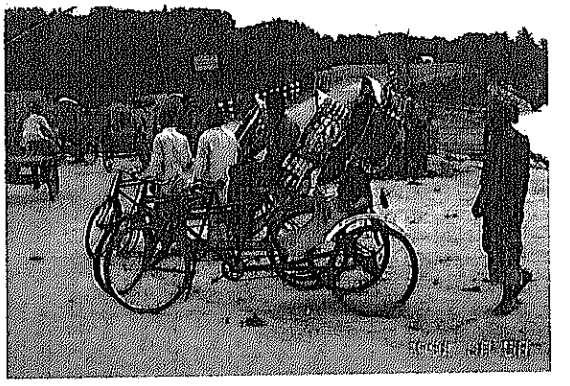


写真３　人々の服装

▶ 第2時

	指導内容	学習内容	指導上の留意点	資料等
導入	●前時の復習	●前時の復習をする。		
展開	●ビデオ鑑賞	●ビデオを鑑賞し、街の様子、人々の服装、交通事情、シティスラムの様子等々を知る。	●ビデオを鑑賞しながら適切な説明を加える。	ビデオ
	●感想を書く	●感想を書く。		
	●国際援助について	●援助の種類について知る。(贈与、円借款、人的技術協力、機材供与等)	●後進性のマイナス面ばかりにとらわれることのないように留意する。 ●国民の税金から使われていることを知らせる。	JICA資料
まとめ	●個人で考えた後グループで討議、グループワーク	●どのような援助が必要かグループで意見を出し合い考える。	●どのような援助が必要か具体的に考えさせる。	用紙

第2時の生徒の意見

●「どのような援助が必要だろうか。」

a）バングラデシュでは乳児の死亡率を下げるために病気のワクチン等にもっと援助すべきだと思う。

b）食糧不足という点から食糧を確保するために米や野菜等の上手な作り方を教えてあげるとよい。

c）コレラや赤痢は不衛生から生まれるので、トイレなどの建設と衛生のための教育が必要だと思う。

d）日本の持っている橋、道路や鉄道の建設技術を教えるとよい。

e）女性が私たちから見て差別を受けるのは腹立たしいことだと思う。特に低い立場に置かれている女性のための教育と、女性が働けるための仕事を増やすように働きかけるとよい。

第3時

	指導内容	学習内容	指導上の留意点	資料等
導入	●前時の復習	●前時の復習をする。		
展開	●バングラデシュの状況把握	●バングラデシュ教育事情、医療衛生状況を知る。(平均寿命、乳児死亡率、主な病気、栄養摂取状況、上下水道、トイレ等々)	●統計資料をもとに、世界の国々と比較してバングラデシュのおかれている状況を把握させる。	UNICEF、JICA資料 写真4、5
	●開発援助の紹介	●主な援助について知る。 メグナ橋、メグナグムテイ橋の建設、浄水場の建設、農村開発家禽研究所、婦人農業研修所等	●インフラ整備、安全な水の確保、効率的な農業生産、タンパク質源の確保、女性の地位向上等々のための援助を推進していることを理解させる。	写真スライド
	●外国の開発援助とバングラデシュの風習、伝統、文化、宗教との軋轢	●外国からの援助とその国が持つ固有の課題を知る。 ①援助後の施設の維持管理の問題 ②固有の国民性が引き起こす問題 ③イスラムによる女性蔑視の考えが女性の社会進出を阻害している状況	●外国からの援助とその国が持つ固有の伝統、文化との摩擦による様々な問題を知らせる。 ● Comilla Bard, OISCA, Bangladesh 家禽研究所の専門家および青年海外協力隊員の話	研修メモ 写真6、7
まとめ	●感想文	●感想文を書く	用紙	

第３時の生徒の感想

●外国からの援助とその国の持つ固有の伝統、文化との摩擦

a）宗教の問題はどうしようもないが、それからくる女性に対する差別的な扱いはゆるせない。みんなで話し合い解決していける問題だと思うし、解決しなければならない問題だ。

b）施設、建物の維持管理はそれに携わる技術者を現地でまたは日本で教育する必要があると思う。

c）その国をまとめていける強力なリーダーが必要で、自分たちの国民的な弱点を克服していけるような精神的な強さを持つことが必要だ。

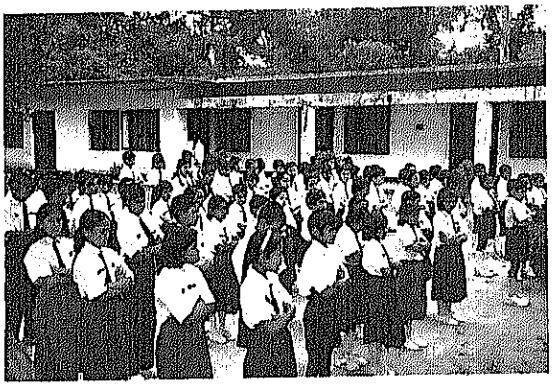


写真４　コミラ市内の学校

写真５　コミラ市周辺の学校

d）日本としては外国が困っていることについては援助をする代わりに、その国が良くなるようにアドバイスすることは大切だと思うので、どんどん言うべきだ。

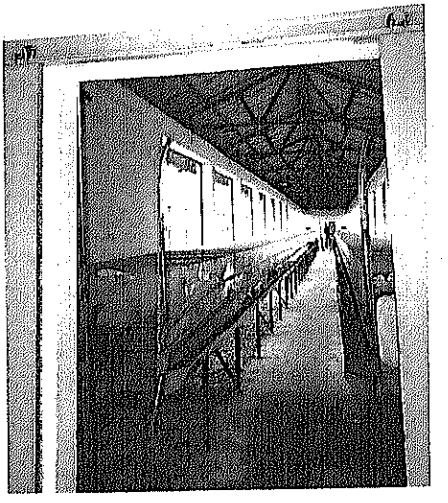


写真６　バングラデシュ家禽研究所

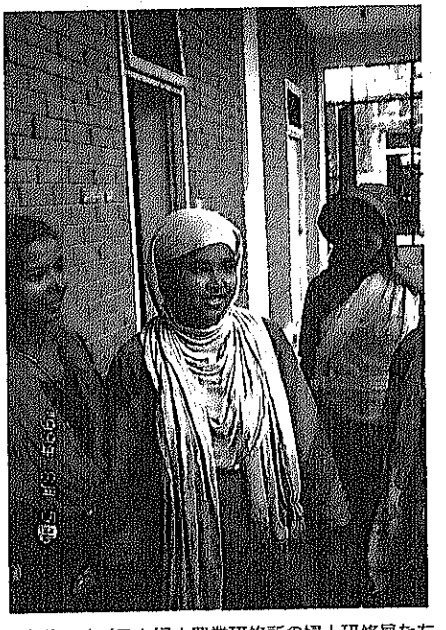


写真７　オイスカ婦人農業研修所の婦人研修員たち

第4時

	指導内容	学習内容	指導上の留意点	資料等
導入	●前時の復習	●前時の学習内容を振り返る。		
展開	●開発途上国とは何か、またその問題点（個人、グループワーク）	●開発途上国とはどんな国か具体的に知る。		
		●開発途上国にはどんな問題があるか。	●良い点、改善すべき点を挙げるように指示する。	
	●国際援助について（個人で、グループで意見をまとめる）	●国際援助について考えさせる。 ①国際援助は必要か ②なぜ国際援助が必要か ③私たちにできる国際援助は何か	●肯定的な立場で助言するが否定的な意見も尊重する。	
	●まとめ グループ発表	●まとめをする。 グループで発表する。	●板書でまとめる。	用紙

第４時の生徒の意見

●「援助は必要かということについて」

a）国際援助は必要だと思う。経済的に豊かな国が恵まれない国の人々に援助をするのは大事なことだと思う。私たちは豊かな国に住んでいるが、もし自分が発展途上国に生まれ、いろいろな問題を持っているとしたら援助をしてもらいたいと思う。

b）絶対必要です。援助のしすぎはダメだと思う。あくまでその国の人々が自立できるように支援するのが必要と思う。

c）必要です。まず教育が一番大事だと思うので、教育に援助すべき。

d）必要だと思う。人間にとって一番大切なことは生命だと思うので、生命に関わるような病気をなくすることに対して援助すべきだと思う。

e）必要だと思う。日本はかつて世界から支援を受けて経済大国になったのだから、今度は飢え、内戦、貧困等で苦しんでいる人々を支援すべきだと思う。

●「私たちにできる援助は何か」

a）学園祭など人が多く集まる時にユニセフの募金をするように働きかける。

b）一人一人が水、石油、電気等の資源の無駄使いをしないようにする。

c）パソコンのインターネットを使い外国の高校生と交流し何か援助をする。

d）小遣いからお金を出し、クラブやクラスでフォスターペアレントになり学校に行けない子供を援助する。

e）学園祭などで海外協力をしている市民グループや団体に募金し、送る。

今後の課題

異文化理解の問題は時々英語の時間で生徒に紹介するが、いずれも欧米のものが多く、アジアのものはきわめて少ないのが現状である。そしてそれはスポット的で授業のごく一部であり、1時間以上に及ぶことは英語の授業についてはないのが現状である。例えば、授業の中で感謝祭に関することがあればそのことを紹介するといったぐあいである。 その点で授業を組み立てるのに、若干のとまどいを感じ、授業の流れや内容も洗練されたものであったとは言い難い。異文化理解ではやはり情報量が大切でしかも、それを視聴覚機器を用い効果的に、しかも公正に伝えていくことが大切であると感じた。

それから今回の授業では扱えなかったが、異文化理解の授業は1教科単独の授業より他の教科と連携して行う、例えば英語科と社会科の現代社会もしくは地理歴史等の教師が共同授業をするという形式をとるのが、授業の活性化、効率化を考えた時に重要であると考える。このことは2002年から始まる高等学校における新しい教科である「総合的な学習」におけるわれわれの課題もある。

おわりに

今回の海外研修は、自分が直接バングラデシュを訪れ自分の目で見て、直接海外援助に携わる人々から話を聞けたことが一番の収穫であると考える。

新カリキュラムで新しい学力観がうたわれているが、まず教師が自分の見識を広め、自分を高める自己研修をすることが重要である。自分を高めようとせず、いつも書物から得た知識を基に同じことを教壇で唱えている教師は生徒を変えることはできないし、また常に自分の授業に対するアプローチの仕方を考え、より良い方法を模索していくという態度が無言のうちに生徒を引きつける授業をすることにつながっていくと信じている。その意味で今回の研修は大変良い機会を与えてくれたと思う。

河川視察の途中で（左が有本教諭）

生徒の主体的な学習を通して考察させる開発教育のあり方

～自然環境と人間の共生から～

KAZUHIRO MIZUGUCHI
水口　和博
地　歴
宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校

1 はじめに

地理教育の関係者からは、「国際化の時代、交流の時代だからこそ地理という科目の真価の発揮のしどころであり、地理の有用性を強調するような授業の実践が必要」などと言った意見が多く聞かれる。しかしその一方で、「ではどのような地理の授業の実践でそれは達成できるか」という問いに対しては、あまり明確な答えが返ってこない。

また、地理の有用性や生徒の主体性を重視した学習などはタテマエ、理想論であり、ホンネ、現実論としては当面の課題である入試をクリアーする必要があり、それに最も効率的な地理の授業といえば教師主導型の一斉授業による地理的知識の詰め込み授業であると考え、実践する傾向が見られた。

しかし今回の研修において、国際社会の中で活動する国際協力事業団職員あるいは専門家、青年海外協力隊員の方々との交流を通して、地理学習のおもしろさや有用性に気付かせながら、受験指導的な地理の授業を展開することによって、もっと豊かな地理の授業を展開する方向で検討し、模索する必要があるのではないかということを強く感じた。

今回は、地理Bにおける「自然環境と人間の共生」という単元の中で、生徒の主体的な学習を通して考察させる開発教育のあり方についての実践例をまとめてみたい。

2 授業展開

現在私が勤務している学校は、山村の豊かな森林資源をはじめ、古くからの生活や文化などを創意工夫によって有効に活用し、「人間性回復の森林」として、生き生きとした山林をつくりたいというフォレストピア宮崎構想の「学びの森」ゾーンのメインとして、来たるべき21世紀の日本を担い、国際社会で活躍する人材を森林という自然を教育のフィールドとして育成することなどを設置の理念として、平成６年４月に全寮制・各学年１クラス40名の中高一貫校として開校した。

木造校舎をはじめ、豊かな自然と地域のつながりの中で、20世紀に見失ったものを再評価するなど、ハード・ソフト両面から質の高い教育実践に取り組んでいる。

平成11年４月、全国初の中等教育学校に校種変更し、中高一貫教育・全寮制そして地域との融合など、さらにその課題や可能性に挑戦しながら、「発信」型の学校を目指している。

▶1時間目：経済開発を地域から考える

そのような恵まれた環境の中で、まず、地球的規模で経済開発を考える導入として、生徒たちが生活する身近な地域を例に経済開発により何が変わったかを考えさせ、これからの授業において、世界の諸地域での変化が、自分の生活する地域の延長上にあることを理解させた。

授業の流れ

数人のグループを編成し、「便利な社会になると伝統文化が崩壊した」という命題を与えて、以下のような図式の「？」(ブラックボックス)内にあてはまる様々な事例を自由に考えさせ、発表させた。

便利な社会 ⇨ ？ ⇨ 伝統文化の崩壊

〈各グループのブラックボックスの主な内容〉

- 電気やガスが供給され、薪で炭を作らなくなった
- 作物などを栽培せず、食料を購入するようになった
- お金が日常生活における価値基準となった
- 交通が便利となり過疎化が進んだ
- 生活に必要なものを作らなくなり、商店などで工業製品を購入するようになった
- 農作業の機械化が進み、地域共同体での共同作業が減った
- 企業や工場が進出し、離農者が増加した

各グループが発表した内容について、順を追って補足説明した。参考文献を読ませ、ローカルな思想の重要性を確認させ、便利な社会となり、私たちが得たものや見失われたものについての感想を最後にまとめた。

▶2時間目：開発途上国の経済開発と私たちの生活との関わりを考える

サンタクルスの経済開発の様子を、研修の写真などを使って紹介した。そして、それらの地域での開発が、私たちの生活とどのように結びついているかについて、以下のように進めて考えた。

授業の流れ

数人のグループを編成し、図1のように、ノートの余白にテーマ(「道路の建設、牧場・耕地の拡大」など)を書き周囲を囲む。そのテーマから連想されることを枝1本につき一つの約束で思いつくかぎり書き出させ、私たちの生活との関わりについて考えさせた。作業が進んだころを見はからって、他のグループのものと見せ合い、共通することや異なることなどを確認させ、発表させた。

①あるグループの発表例（図1）

道路の建設 ⇨ 自動車の利用が増える

⇨ 日本車の輸出が増える ⇨ 景気の回復

⇨ 求人倍率が増える

▶3時間目：「開発」か「保護」かの視点から開発途上国の経済開発のあり方と留意点を考える

経済開発と森林伐採の恩恵および森林破壊の影響について考察させ、自分の意見をまとめることを目的としてロールプレイを行った。

その際、前回の授業でのサンタクルスにおける経済開発が私たちの生活との関わりがあるということをもう一度確認させて行った。

なお、この手法は、New-Wave Geography(翻訳・ERIC国際理解教育センター）を参考にした。

授業の流れ

「ボリビアに住む小さな村へ経済開発の波が押し寄せてきた」という仮説を与え、これに従いロールプレイを以下のように行った。

①グループを編成する

本人の希望にあわせて「村の代表者」「投資家の代表者」「環境保護団体の代表者」の三つのグループに分け、自分の立場を鮮明にした。

②各グループに対し、条件および強調点を提示した。